進捗報告書

報告者氏名：薄　洋介　　所属：渋谷区立神南小学校　　記録日：２０１９年２月２２日

【対象児の情報】

・学年：小学校５年生（男）

・障害と困難の内容：読み書き障害の疑い

【活動進捗】

・当初のねらい

⑴　自己の特性を理解し、学びやすい学習方略を身に付ける

⑵　書き言葉によるコミュニケーションの機会を保障する

・実施期間：平成３０年４月～平成３１年３月

・実施者：薄　洋介

・実施者と対象児の関係：通級指導学級の担当教員

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

＜今までの経緯など＞

・自分の気持ちを上手く表現できない・読み書きの苦手さ・学習の困難さを主訴に、第１学年より渋谷区の「きこえとことばの教室」に通級している。（今年度は週５時間／個別指導）

・授業中やテストの時、わからなさから頻繁に涙をこぼしていた。

「これ（テスト）を見たら、お母さんが悲しむ」

・第３学年時には学習面で自信をなくし「自分は何をやってもダメなんだ」と口にするような状態だった。

・学校での出来事を家族に聞かれてもうまく思い出すことができず、話ができないことに一人悩んでいた。

・頭痛などの身体症状を訴えることも多かった。

＜本児の様子＞

読むことの状態

・言葉をまとまりで捉えるのが苦手であり、勝手読みや読み誤りが頻繁にある。

・逐次読みまではいかないが、読む速度は遅い。

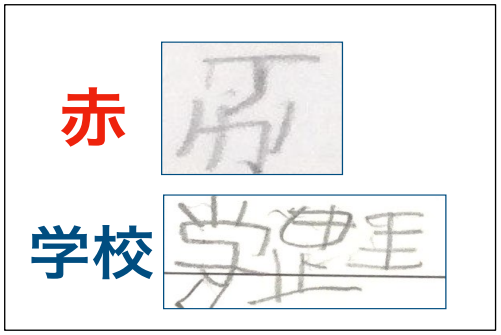
・小学校第３学年相応の漢字は７割程度読めるが、総じて漢字を読むのが難しい。

書くことの状態

・平仮名を書く際、想起まで１０秒以上かかることがしばしばある。

・字形は整っていないが、判別できないような文字ではない。

・本人曰く、「文を書く時は字を書くことにエネルギーをとられてしまって、途中で書くこと（内容）を忘れてしまう」とのこと。（キーボード入力だと、このような現象は少ないとのこと）



本児の書いた漢字

聞くことの状態

・純音聴力検査の結果は平均の域だが、音韻意識に弱さがみられる。
・集団での指示は概ね聞いて理解することはできるが、忘れっぽく、情報を保持することは苦手である。

話すことの状態

・自分の考えや思いが頭に浮かんでいるときでも、言葉で表す（発話）までに一定の時間がかかる。また、話しにまとまりがなく、だらだらと話してしまう傾向がある。

計算の状態

・暗算が苦手で、１桁同士の足し算や引き算にも時間がかかる場合がある。
・掛け算の概念自体は理解できていたが、「九九を覚えること」が定着しなかった。

その他

・映画が好きで、２時間ものも楽しめる。
・幼児期より英会話教室に通っており、ローマ字は習得している。
・自宅で PC のパーツ交換や増設を行うなど、テクノロジーには高い関心がある。

本児の実態のまとめ（各種検査・聞き取り等より）

- **知的発達は「平均の下」と考えられる**（WISC-IV より）
- **読み書きに弱さがみられる**（STRAW 等より）
- **言語は強そうだ**（WISC -IV より）
- **聴覚優位**（WISC -IV・聞き取り 等より）
- **意味を添えた方が記憶に残りやすい**（有意味＞無意味）

（１）自己の特性を理解し、学びやすい学習方略を身に付ける

（１）－１　漢字学習

①「ＶＯＣＡ－ＰＥＮ」

・自分の声を録音し、それを音声の補助として漢字の読みの学習を行った。

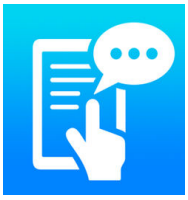
(1)－２　読み

①「音声付教科書」

・音声支援で読みを支え、内容理解を促すために用いた。

②タッチ&リード

・単元テストやプリント学習を読み上げにより実施した。
　また、本や雑誌を音声化し、読む経験を増やすために用いた。



（1）－3　書き

①「Ｓｉｍｐｌｅ Mind＋」

・思考を整理したり、気持ちを表したりしやすくするために用いた。

②「メモ」（キーボード・ローマ字入力）

・キーボードでローマ字入力をすることで「書くこと」への負担感を軽減し、表出のしやすさを促した。

③「タイピング練習（ベネッセ）」

・本児のタイピングスキルの向上のために用いた。

④「OneNote」

・将来的（第６学年～中学）なノートテイクのため、今年度はそのための準備期間とし、操作を覚えたり、慣れたりすることに重点を置いた。

（2）書き言葉によるコミュニケーションの機会を保障する

（2）－1　チャットアプリで書き言葉によるやりとりを行う

①「By Talk for School」

・書き言葉でのコミュニケーションを行うために用いた。

＜支援ツール選択の根拠＞

	音声	書字
入力	聞く ・ICレコーダー ・VOCA-PEN 何度も聞ける	読み ・読み上げツール デコーディングの支え
出力	話す ・マインドマップ 記憶の支え	書き ・キーボード ・チャットツール 表出のしやすさ

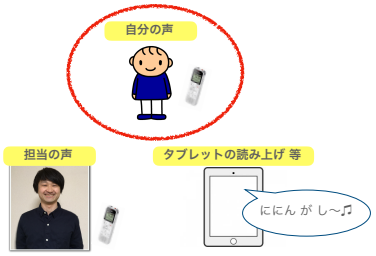
○対象児の事後の変化

（１）自己の特性を理解し、学びやすい学習方略を身に付ける

（１）－１　九九を覚える

・IC レコーダーに九九を唱えて録音し、それを繰り返し聞く活動を行った。
・録音する音声は、担当者の声やタブレットからの読み上げなど、複数の選択肢を提示したが、結果的に「自分の声」を選択した。
・本人が手応えを感じ、約３ヶ月で九九は概ね定着した。

複数の選択肢から自分の声を選ぶ



ICレコーダーに自分の声で
九九を吹き込み、聞かせてみた

「…これはよさそう」

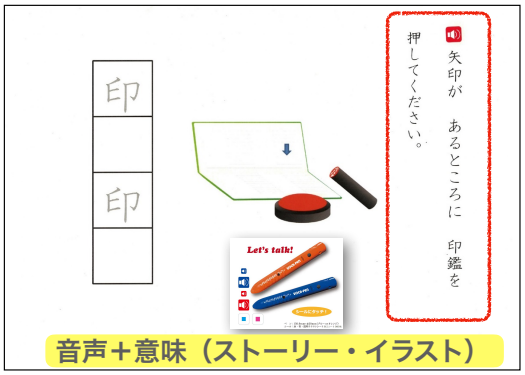
その後、約３ヶ月で九九が定着

（１）－２　漢字学習

①「ＶＯＣＡ－ＰＥＮ」

・『矢印があるところに印鑑を押してください』のように、音と訓の読み替えを含む文章を、自分の声で読み上げ、「ＶＯＣＡ－ＰＥＮ」に録音した。それを音声の補助として、漢字の読みの学習を行った。
・一週間後に確認を行っても、７～８割程度覚えていることが多かった。九九同様、聴覚的な補助は本児の記憶の定着に有効な手立てであることが推測された。
・「選挙」「気象」「公共」など、本児に馴染みのない漢字は定着に時間がかかる傾向がみられた。本児の漢字の読みの定着を図っていく上で、書き言葉の語彙の向上も同時に行っていく必要がある。

音訓読み替え課題の文章を読み上げ、録音する



録音した自分の声を繰り返し再生

ロボットに関心があります。
ロボットに関わる仕事につきたいです。

（1）－2　読み

①「音声付教科書」

・初見の文章は、はじめに「音声付教科書」で読み上げを行った。読みの負荷のない状態で内容に触れることができるためか、「話の中身が頭に入ってきやすい」と本児は述べていた。また、音声モデルがあることで、言葉のまとまりを捉えやすくなり、音読の際に流暢性が増す傾向が見られた。

文を読み上げてくれるペン付きの教科書

音声付教科書

「音声付き教科書」で音読練習を行っている場面

②「タッチ&リード」

・「タッチ&リード」を用いて、単元テストやプリントの読み上げを行った。読み上げを行うことで、国語の単元テストにおいて点数が向上したり、解答時間時間が短縮したりした。本児も「内容に集中しやすい」と述べるなど、学びやすさを実感している様子がうかがわれた。

画像のテキストを読み上げてくれるアプリ

タッチ＆リード

「タッチ＆リード」を用いてテストを受けている様子

（1）－3　書き

①「Ｓｉｍｐｌｅ Mind＋」　②「メモ」（キーボード・ローマ字入力）

・考えや気持ちを文章で表す際には、「Ｓｉｍｐｌｅ Mind＋」で考えを整理した後、それを基に「メモ」にキーボード入力（ローマ字）で打ち込んでいった。

・本児は鉛筆などで書字を行おうとすると、書いている途中に書きたい内容を忘れてしまうことがよくあったが、キーボード入力だとそれが少なくなると述べていた。

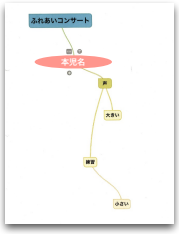
「書き」への支援

＋

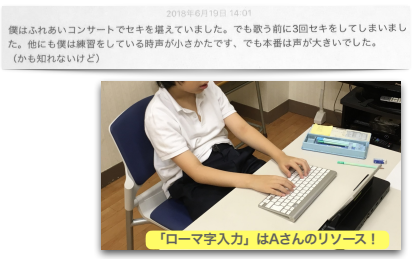
マインドマップ　　タイピング入力

①アイデアをマインドマップでまとめる

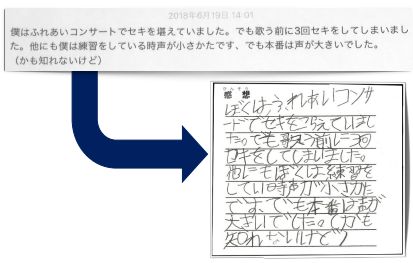
SimpleMind+



②それをもとにタイピングで文をつくる



③入力した文章を書き写す

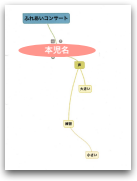


＜本児が感じるメリット＞

本児が感じるマインドマップの良さ

・考え（アイデア）に集中できる

・記憶の助けになる



本児が感じるタイピングの良さ

・文字を思い出しやすい

・漢字変換ができる

・考え（文）が浮かぶ気がする

③「タイピング練習（ベネッセ）」

・継続的にタイピング練習を行った。

・成績を記録していくことで、自分自身で成長を実感できるようにした。

④「OneNote」

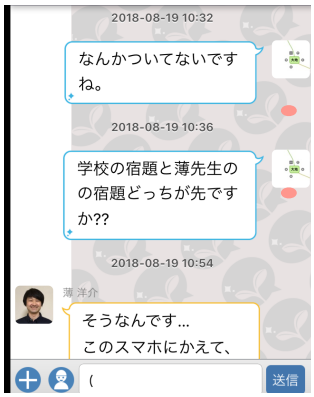
・通級時に、ファイル作成や画像を添付する練習を行うなどし、操作への慣れを促した。また、実際の活用事例を動画で確認し、教室で使用する際の具体的なイメージを促した。

（3）書き言葉によるコミュニケーションの機会を保障する。

（3）－1　チャットアプリで書き言葉によるやりとりを行う

①「By Talk for School」

・チャットでの日々のやりとりの中で、気になった伝わりづらい表現などを通級指導の際に取り上げ、調整をはかっていった。チャットアプリでは履歴を確認することで、簡単に振り返りを行うことができる。そのため、実際にあったやりとりの中からフィードバックを行うことができ、本児にとっては話の文脈を掴みやすく、イメージがしやすい様子がみられた。使用当初はチャット自体に不慣れなこともあり、やりとりが「できた」「わからない」など単語中心だったが、少しずつ文で思いを伝えてくるようになってきた。



チャットログを活用し、伝わりやすい表現を促す

・ログ（話の流れ）を記憶や支えに使う

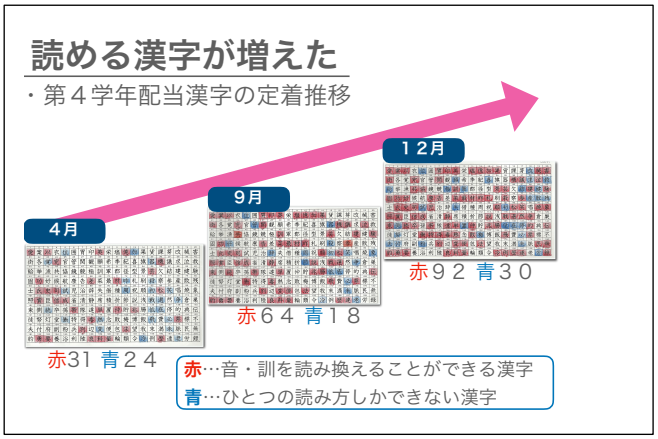
【報告者の気づきとエビデンス】

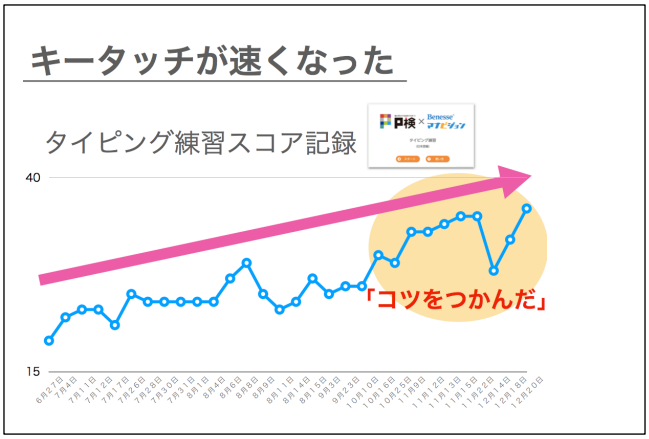
○主観的気づき

・本児は忘れてはいけないことはメモをしたり、疑問に思ったことは Google で検索をかけたりするなど、少しずつ自ら考え、工夫することが増えてきた。テクノロジーによる支援などから「これならやれる」と感じることが増え、自信を取り戻していった結果だと感じる。

・様々な観点からアセスメントを行い、本児の状態像を浮き彫りに出来たことで、本児の実態に合わせた支援策（機器）の選定を行う事が出来た。その結果、「短期間」で変化が見られるような支援に繋がった。本児は「短期間」で自分自身の変化を感じ取ることができ、そのことが自己肯定感の回復にうまく繋がったのだと感じる。失われた自信を取り戻すためには「自分自身で」「スピーディに」効果を感じることのできる支援が有効なのだと考える。そのためには、多面的でバランスのよいアセスメントを行い、実態に合わせた支援計画を組んでいく必要がある。

○エビデンス





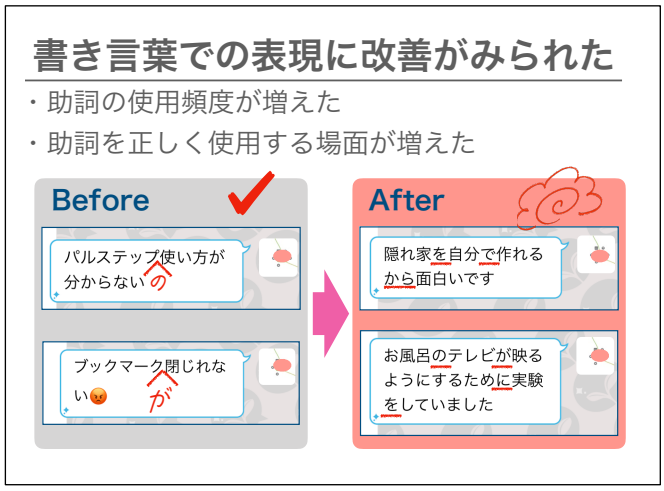
＜漢字について＞

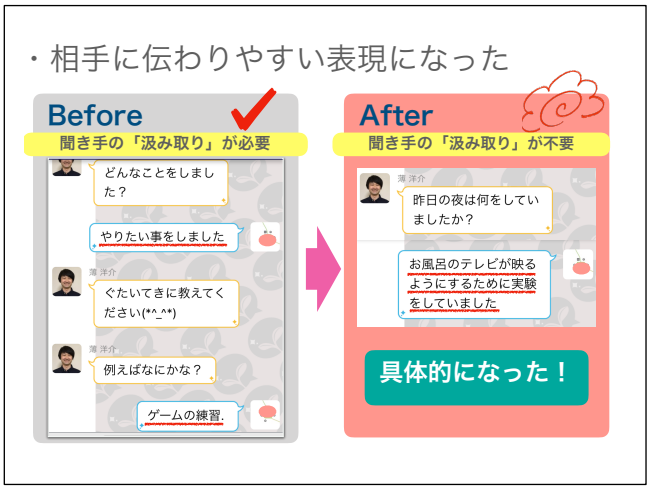
・第４学年配当漢字の読みについて、読むことができる漢字が増えた。音訓読替えができる漢字も増えた。

＜タイピングについて＞

・キータッチが早くなった。

・タイピングスキルは「他の人より優れている、自分の強みなんだ」という意識が芽生えた。





＜書き言葉について＞

・助詞の使用頻度が増え、正しく使用できる場面が増えた。

・助詞の使用を間違ったときに、自分で修正をかける場面が増えた。

・以前は聞き手が状況や今までの経緯などから、伝えてきたことの意味を汲み取る必要がある表現が多かったが、説明が具体的になり、聞き手の汲み取りが必要ない表現が増えた。

<タブレットでのノートテイクについて>

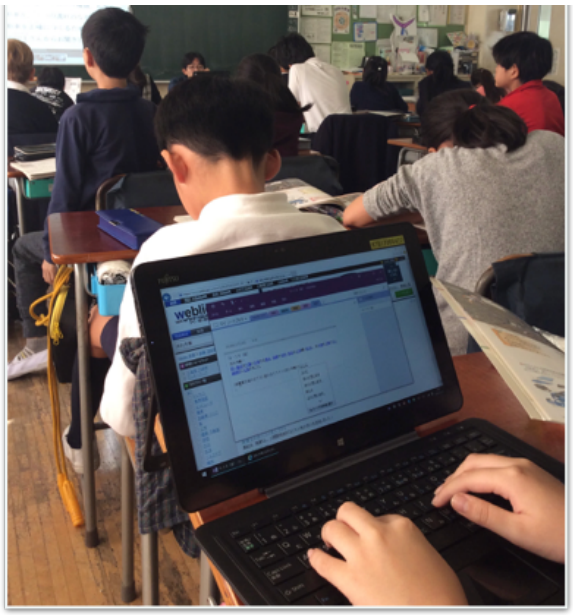
・通級時に基本操作を学び、１１月より在籍学級でタブレットでのノートテイクを開始した。

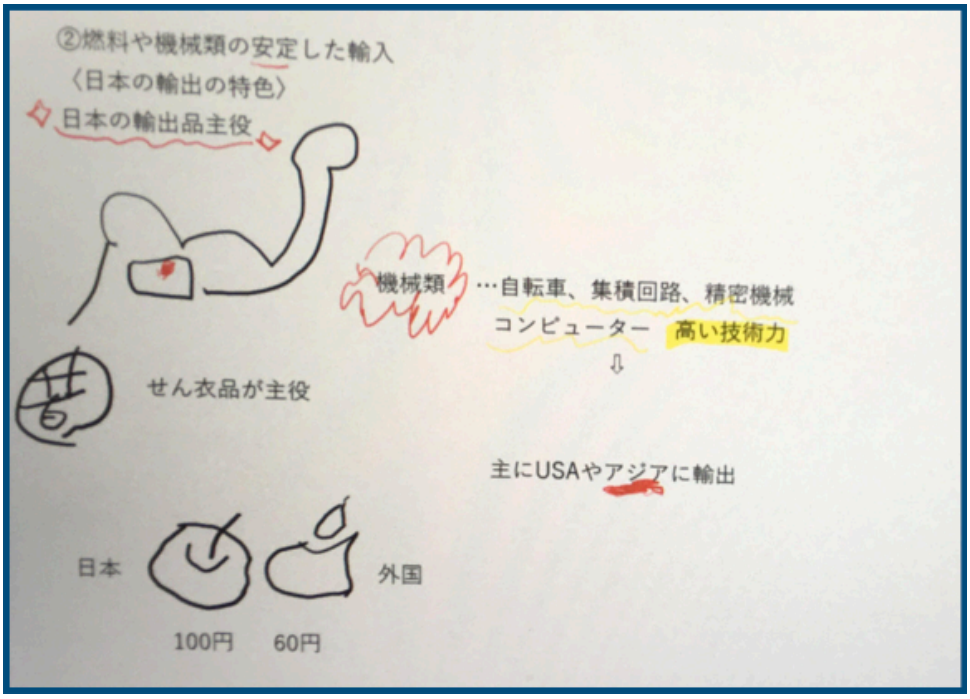
・導入に際して、担任から在籍学級の児童にタブレットでノートテイクをする旨のアナウンスを行ってもらった。渋谷区では一人一台タブレットが配布されていることもあり、教室での使用について、本児に不安そうな様子はあまり見られなかった。

・導入当初は児童の側に付き、必要に応じて操作のサポートを行った。そして、徐々に自分一人で操作する時間を増やしていった。

・まだ学級で導入して間もないが、現段階においても、タブレットでのノートテイクの方が鉛筆で書き写すより早い。今後習熟していくことで、よりスピードアップしていく事が予想される。

「OneNote」を用いたノートテイク場面



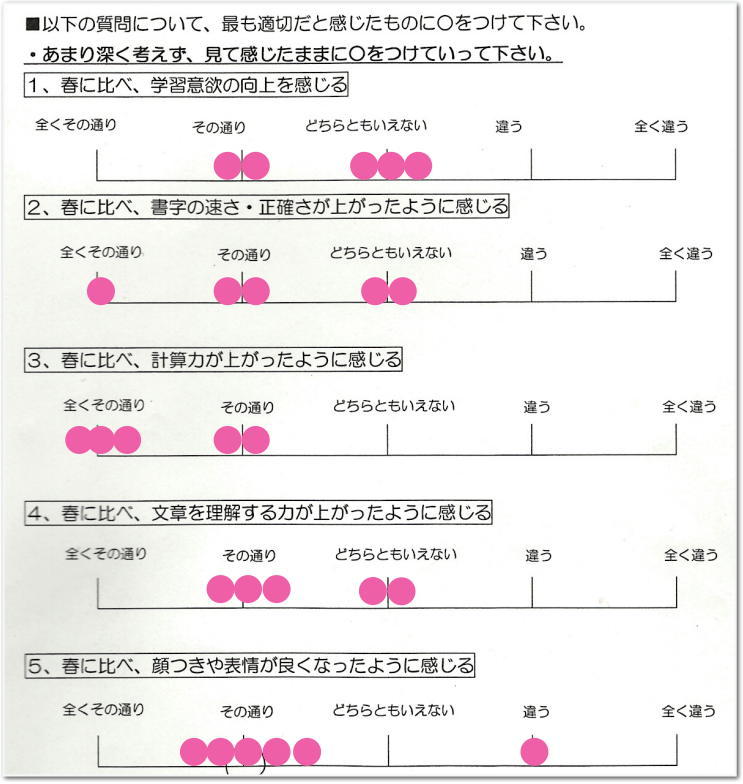


実際にノートテイクしたもの（社会科）

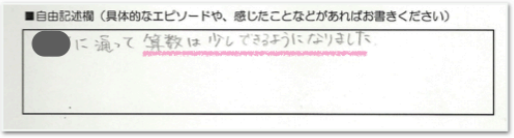
【周囲からの声（アンケート）】

周囲（保護者・担任・少人数クラス担当 等）からの声

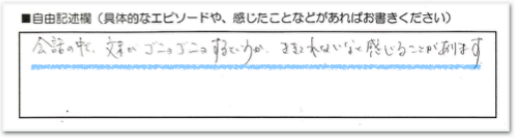
アンケート集計結果



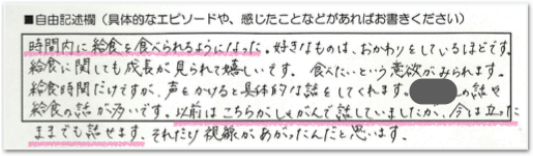
アンケート自由記述欄のコメントより



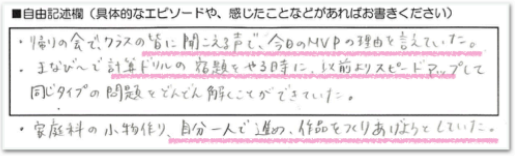
・算数が少しできるようになった



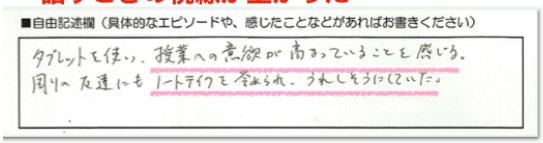
・会話の文末が聞き取りづらい時がある



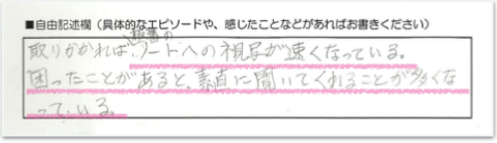
・時間内に給食を食べられるようになった
・話すときの視線が上がった



・帰りの会での発言の声が大きくなった
・計算のスピードが上がった



・授業への意欲の高まりを感じる
・周囲にノートテイクを褒められ、喜んでいた



・視写が早くなっている
・困った時、素直に聞いてくることが増えた

＜本児の自己肯定感の高まりを感じたエピソード＞

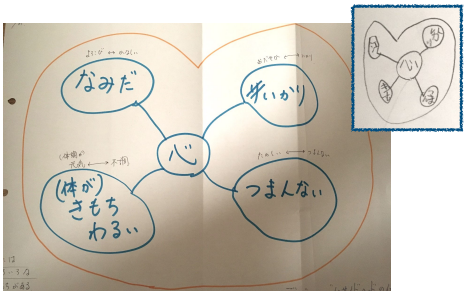
不思議なマインドマップを描いた

・「寛容」がテーマの授業
・「広い心とはどんな心だと思いますか？」

Aさんのワークシート

…後日、聞き取りをすると意図を説明してくれた

「“人には色々な気持ち（感情）がある”と言いたかった」



・道徳の研究授業があり、教員２０名ほどが見学にきていた。テーマは「寛容」。
・授業の最後に、「広い心とはどんな心だと思いますか？」という問いを、ワークシートに書く課題がでた。

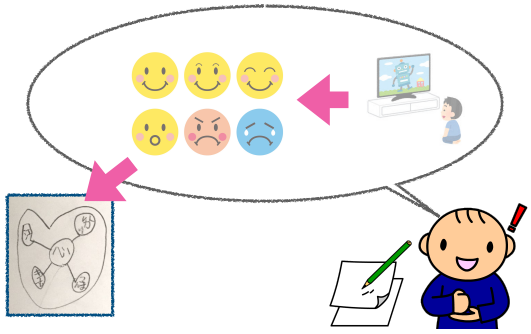
Aさんはなぜか泣きながらシートを書いていた

（時間内に書き終わらなくて、きっと悔しかったんだろうな）

担当

・本児は涙を流しながらマインドマップのようなものをシートに書き込んでいた。
・私は「きっと時間内に書き終わることができなかったから、悔しかったのだろうな…」とその時は感じていた。

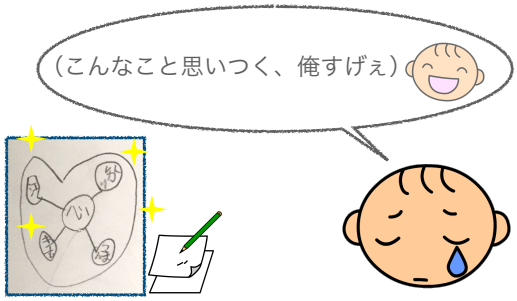
でも実際は…



まさかの嬉し泣き

・良いアイデアが浮かんだ自分自身に驚き、涙が出た

（こんなこと思いつく、俺すげぇ）



・しかし、後日に涙の訳を聞くと、こちらの予想とは全く異なる思いがあったことがわかった。
・本児は人の感情がテーマのあるアニメ映画のことを思い出し、そのイメージに重ね合わせながらマインドマップを描いたとのことだった。
・本児はあの場面で、書き終えることができなくて悔しかったのではなく、自分の思いがけないアイデアに感動し、嬉し泣きをしていたとのことだった。「こんなこと思いつく、俺すげえ」と思ったそうだ。
・今まで興味がもてず、学習の参加が難しかった道徳の授業において、自分の考えを絞り出せたことにとても充実感を覚えた様子だった。本児の意見は学級で紹介され、周囲から賞賛されたとのことだった。その後、本児は道徳の授業への自信を深め、積極的に挙手をする場面もみられるようになった。
・時間がないなりに自分の考えを表そうと試行錯誤する姿勢、ひねり出した自分なりのアイデア、自発的に活用したマインドマップなど、様々な面で担当者が本児の成長を感じたエピソードとなった。

【今後について】

（1）学習空白をいかに埋めるか

・優先順位を明確にし、着実に積み上げる。

・校内、校外のリソースをフル活用する。

・一人でも学習できるようにする。

（2）中学校まであと一年、切れ目のない支援を行う

・必要な支援を本人と一緒に考える

・援助要請スキルを高める

・中学校との連携・関係作りを行う